

水の都、広島

太田川のデルタ地帯に建設され、瀬戸内海へ面している広島は、これまで常に水の都でした。この街は、6つの川の流れにより文字通り形作られています。それらの川が広島中心部を5つの主な小島に分割し、80以上の橋がそれらの島をつなぎ合わせています。「広島」という名前も、「広い島」を意味します。港町としての広島の始まりから、水上タクシーや住吉祭の儀式的な船まで、それらの川は道路と同じくらい街の生活の大切な一部となっています。

広島は江戸時代（1603～1867年）まで遡る大規模な埋め立てプロジェクトにより、周りの水路も有利に形作ってきました。それらのプロジェクトが海岸線を大きく変え、徐々に街を広げてきたのです。瀬戸内海は潮の満ち引きが大きいので、広島のエンジニアたちは現代の技術の恩恵がなくても、単純に干潮時に堤防を作ってその背後を土で埋め、より多くの土地を作り出すことができました。

第2次世界対戦の終戦以来、広島はすでに街の経済の重要な一部だった川を、娯楽のための空間にもすることに力を入れてきました。街の復興努力の一環として、川の土手に沿って公共公園が設置され、歩道や自転車道が設けられました。カフェやレストランが古い倉庫に取って代わり、川の土手では人々が腰を下ろして街の動きを楽しむことができる、のんびりとした空間に変わりました。